

(論文)

スウェーデンの社会と博物館 II

—スウェーデンの博物館活動にみる3つの特徴—

Some Observations Concerning Swedish Society and Museums : II —Three Characteristic points of Museum Activities in Sweden—

奥 田 環
Tamaki OKUDA

Abstract

The author has a great interest in Swedish museum activities, because there are various advanced and rational views among them, and the social system backs them up positively.

In this paper, the author focuses on three characteristic points concerning Swedish museum activities ; the National Cultural Policy in 1974, the Swedish Travelling Exhibitions and the professional exchange programme between museums in Sweden and Africa . These points have a close connection with social education and welfare, and they make steady progress.

With intensive research on them, the Swedish society will be understood more clearly. Government properly recognizes the role and significance of museum, and makes the most of it such that people are attached to museums. The author rates Swedish cultural administration for museums high.

はじめに

スウェーデンの博物館は、その活動および社会とのかかわり方において非常に興味深い点が多い。その具体例として、私は先に『スウェーデンの社会と博物館 I—ストックホルムの東方博物館について—』と題し、東方博物館のインテンデント¹⁾に対する個人インタビューをもとに同館の現状を報告し、あわせて博物館とその社会的背景について考察を試みた²⁾。

続いて本稿では、スウェーデンの博物館の発達史を概観した上で、同国における一般的な博物館活動のうち特に注目すべき3点を取り上げて論じる。すなわち博物館行政の要となる1974年の文化政策と、それを基調にして展開される巡回展示会、スウェーデン・アフリカ博物館交換プログラムである。それによりスウェーデン社会をさらに明確に理解するとともに、それらが個々の博物館にいかにかかわっていくかという個別検討へのステップとすることも目的としている。

なお前稿同様、スウェーデン語名称の邦訳は全て筆者によるものであり、原則としてスウェーデン語名称に続いて英語名称を記す。ただし英語名称しか判明しなかったものもある。

I 博物館の発達

(1) 文化遺産の保護と博物館

スウェーデンはかねてより文化遺産の保護に対する関心が非常に高く、長い伝統がある。早くも17世紀には、文化遺産保護を旨とした特別官である文化遺産総監 Rikssantikvarien ; Director General of National Antiquities が国家によって設置されている。そして歴史的記念物の保護に関する法が成立し、文化的価値の高い建造物などの保護規則が整えられた。目録や図版の作成、解説といった文化遺産に関する研究の第一歩がみられるのも、17世紀中のことである。

当初はまず考古学的遺物に注意が向けられた。有史以

*おくだ たまき

連絡先 川村学園女子大学文学部史学科

〒270-11 千葉県我孫子市下ヶ戸1133 Tel. 0471-83-7113 Fax. 0471-83-0115

Department of History, Kawamura Gakuen Woman's University

1133 Sogeto, Abiko-shi, Chiba 270-11, Japan Tel. 0471-83-7113 Fax. 0471-83-0115

前の墓地、石積み塚、ルーンの石碑、古城や僧院、堡塁といった遺構、教会や歴史的建造物などである。これらに文化的価値を認め保存に意を払うのは、つまりそれがスウェーデンに国家としての歴史的背景と正当性を与えるものと認識されたからである。スウェーデンの文化政策は、国家のアイデンティティーを保護し確立するという観点から始められたといえよう。

このような姿勢は、時がたつにつれて多少の変化はあっても、基本的には20世紀半ばにいたるまで受け継がれてきた。1930年代までは、遺物遺構の補修対象となるのはあくまで「国家の」歴史的建造物に限られており、1942年になってようやく市営や個人所有の建造物の保護にも手がのばされている。

17世紀以来、文化遺産の保護は常に文化遺産総監によって主導されてきた。次なる画期は、文化に対し個人的に高い関心を持った国王グスタフ3世 Gustav III（在位1771～1792）が王位に就いた18世紀後半である。彼は1789年に王立スウェーデン文書・歴史・古化学アカデミー Kungliga Vitterhets-, Historie-, och Antikvitetsakademien ; Royal Swedish Academy of Letters, History and Antiquities を設立し、それを文化遺産保護業務の中核機関として位置付けた。そして従来の文化遺産総監をその長官として組み込んだ。これをきっかけとして、以後文化行政と博物館活動が密接なかかわりを持つようになる。

19世紀までの間に、アカデミーの保護を受けて様々な分野で博物館活動の進展がみられた。博物館は文化遺産保護に尽力することをその使命とするとともに、遺物や収集物などを保管する場としての業務を請け負い、次第に地域社会におけるその役割が明確にされていった。アカデミーは常に各博物館を後援する機関であり、その行政長官としての文化遺産総監が博物館活動を全体的に総括する立場にあった。

しかしこれらの活動がかなり広範囲にわたり、さらに専門化の必要性が望まれるにいたり、20世紀にはアカデミーを発展的に引き継ぐかたちで、2つの専門機関が設立された。保護業務を担当する文化遺産中央評議会 Riks antikvarieämbetet ; the Central Board of National Antiquities と、博物館活動を援助する国立歴史博物館 Historiska Museet ; the Museum of National Antiquities である。文化遺産総監は前者の中央評議会の長官となった。国立歴史博物館は19世紀に設立されており、ここで博物館としての業務を果たすとともに、博物館活動の中核機関としても機能することになる。

さらに、後述する1960～70年代の文化行政改革の時期を経て、この2機関は再び統合される。文化遺産中央評議会は遺物遺構の保護や保存をつかさどる機関として独立して機能し、国立歴史博物館は、博物館活動を総括する機関である文化事業委員会（後述）の下部組織として、なおも今日に引き継がれそれぞれの業務を果たしている（第II章および図1参照）。

(2) 地方博物館

ところで次に、地方レベルでの各博物館に目を向けてみよう。19世紀の博物館活動の興隆期に、国内各地域においてもそれぞれコレクションが蓄積され始める。それが当初は考古学や地方史の任意団体によって運営される博物館として発展した。19世紀後半から20世紀にかけて、すでにこれらの博物館が国内に均等に、一般的には1つの地域に1館の割合で、分布していた。しかしこれらの博物館は十分な資金に欠け、また概して専門の職員がいなかった。

20世紀初頭には、中央において文化遺産総監に直属し地方文化行政を担当する、約10名からなる地方専門の公的機関設立が提言されている。しかしこの計画は、第一次世界大戦に続く経済危機により挫折した。そこで当時の文化遺産総監カーマン Sigurd Curman は、その役割を地方の博物館に委ねよう主張した。しかし資金や専門職員が不足している地方博物館が、中央の文化遺産総監の総括のもと、各地域における文化行政の中核機関として機能するためには、様々な補強がなされる必要がある。そこで1930～40年代にかけ、地方博物館に対して特別国家補助金が与えられた。それにより専門職に携わる適任者が雇われ、館の新改築が進められる。1947年には、それまで臨時の補助金に過ぎなかった政府の援助が恒常的なものとして確立され、それ以来毎年、各地方博物館は国家補助金を交付されている。なお補助金は、各館の賃金コストに対応して増額されるものである。

II 1960～70年代における行政改革と文化政策

(1) 文化行政と博物館

スウェーデンの文化行政および博物館活動に大きな転機が訪れたのは、1960～70年代のことである。地方博物館の発達は文化遺産の保護と密接に結びついていたので、それまでの博物館の主な関心事は、もっぱらそのコレクション、資料の収集、記録、保存にあった。しかしこの頃から、市民を対象とした活動―すなわち展示というかたちでの資料の公開が注目をあびるようになり、同時に地方博物館の役割と義務が議論され始めた。ここにおい

て各博物館は、現代社会の発展と決して無関係ではいられなくなった。従来の博物館業務に加え、社会的な存在意義が問われるようになる。

さらに全国的な国土開発計画の中で、文化的視点から地方博物館と行政とのかかわりがより密接になる。開発と歴史的環境保全との接点で、博物館の果たす役割が非常に重視されるようになったのである。また地域社会の行政的・社会的整備にともない、博物館の市民に対する還元についても新たな意義が見出された。

1970年代には、国家行政機構における全体的な組織改革が行われている。それまで様々な中央機関に個々に所属してきた、地方における国家の出先機関が統廃合され、地方行政委員会の独自性が重視されるようになる。文化行政面では、この地方行政委員会と地方博物館との連携により、地域の保全と開発計画が進められていった。今や博物館は、一方では地方行政委員会と、他方では農林業、道路建設、エネルギー供給などの計画および実行をつかさどる機関との密接な協力関係を確立し、その責任も一層重いものとなったのである。また歴史的環境の保全に対する義務と責任を徹底するため、様々な法律の改正が相次いだ。例えば農林業における法律では、新しい規則としと文化遺産に対して必要な保護と考慮の方法について言及している。

ここにいたり、文化行政には広範囲の需要と総合的な視点が包括されることになった。文化遺産は単に保存されるだけのものではなく、未来の社会を築くための情報源とみなされるようになる。単なる「文化的・歴史的記念物の保存」とってかわる、「文化的に価値のある日常周辺すべての保全」という新しい概念は、また地方の主体性の伸張と地域連帯の意義の増大における、文化行政の重要性を示すものでもある。

文化行政のなかにあった、博物館の果たす中心的な役割はますます明確になってきた。そこには文化遺産に関する知識の流布と、文化的価値を損なわずに土地や建物を保護していく方法をその所有者や使用者に教授していく必要も出てくる。博物館には幅広い専門的知識と、教育能力が要求される。また地域の歴史的環境を整えることにより観光客の関心を惹き付け、地域の振興に役立つことも望まれている。そして地域社会においては、展示や討論の場、地域の学校や大学と共同で仕事が行われる場、歴史的背景に関する情報を提供する場として貢献しているのである。

以上、もっぱら地方レベルにおける博物館活動と文化行政の統合について述べてきた。次にスウェーデンの国

家としての文化行政全般に目を転じてみよう。

(2) 1974年の文化政策

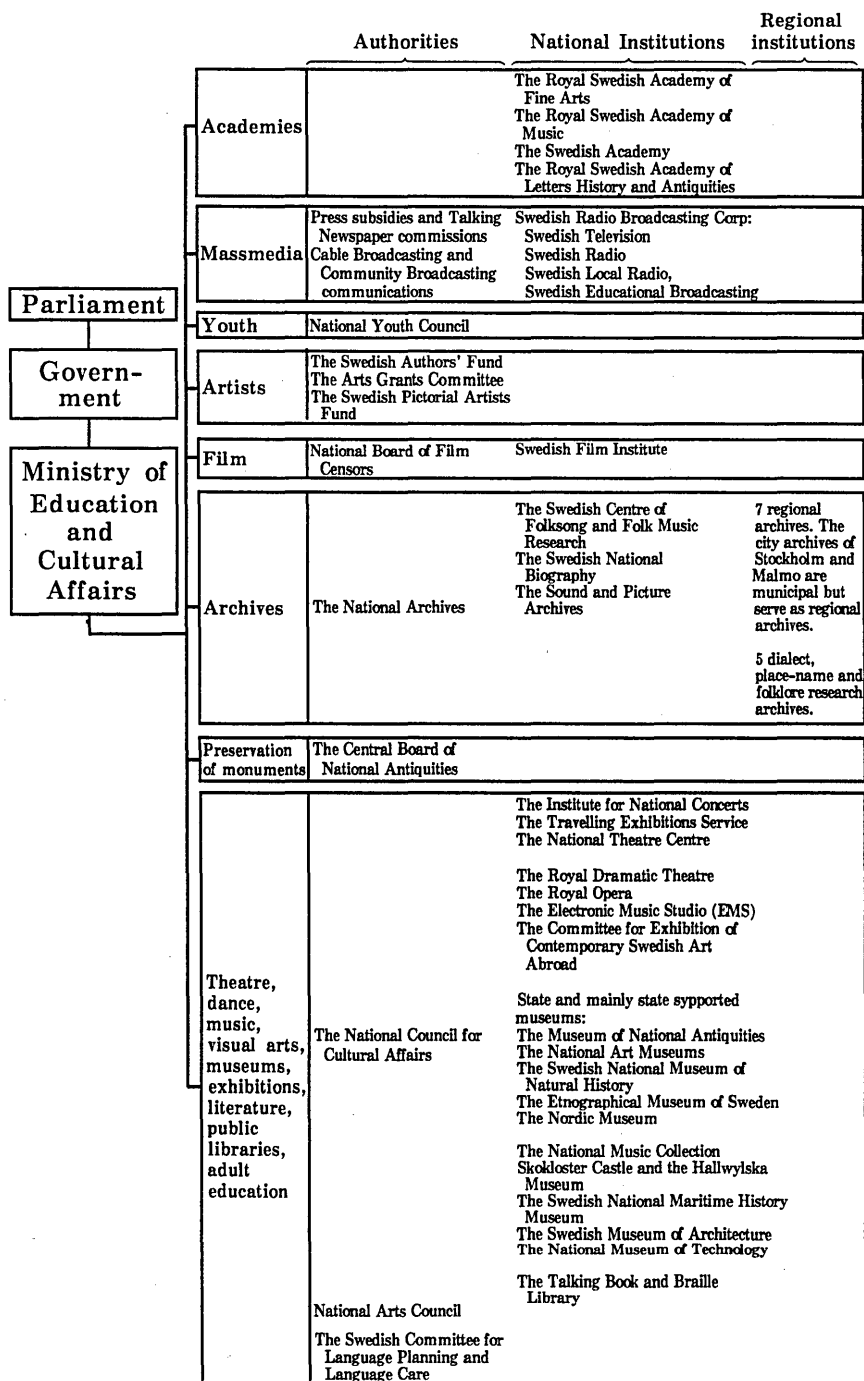
世界的な視野でみれば、スウェーデンの人々、文化、伝統、言語はいわば少数派に属する。そのなかで国家のアイデンティティーを確立していくためには、まず同国の自然の規模と特徴を十分認識した上で、それを受容しなければならない。文化政策のガイドラインを作成するにあたっては、文化の領域における国際的交流の促進の必要と同時に、スウェーデン固有の生活様式や同国のアイデンティティーの保護が非常に重視されている。

1974年スウェーデン議会は、文化機関に対する多額の助成金を盛り込んだ文化政策を、満場一致で採択した。いわゆる「国家文化政習 Kulturpolitik ; the National Cultural Policy」である。この文化政策こそが、1960年代から始まった全国的な文化活動模索の流れの、1つの帰結であった。これはしばしば「1974年の決議 the 1974 Resolution」と表現され、現在にいたるまで同国の文化行政を規定するものとなる。そこには「文化的平等は、まさに経済的・社会的平等と同等の重要性がある」という価値観がみられ、また文化行政における3つのレベル、すなわち国家、地方、市町村の活発な協力と相互作用を求める理想が打ち出されている。以下に、「国家文化政策」に明示された8つの目的をあげておこう。

- 1 言論の自由を保護し、この自由を利用する機会を創り出す。
- 2 人々に自らの創造的活動を実現する可能性を与え、かつ他者との交流を奨励する。
- 3 文化領域における商業主義の悪影響を排除する。
- 4 文化領域における意志決定機能および活動を分散させ、一極集中を避ける。
- 5 かつて不利を被ってきた集団や社会的弱者の要求に応える。
- 6 芸術と文化の革新を促進する。
- 7 過去の文化遺産を保護し、復活させる。
- 8 言語や国家の違いを越えて、文化領域における知識と経験の交流をさらに進めていく。

文化政策の決定にともない、1974年に行政機構も大幅に改革された。まず文化政策を促進するための機関として、文部省のもとに文化事業委員会 Statens Kulturråd ; the National Council for Cultural Affairs が設立された。この委員会が、劇場、ダンス、音楽、視覚芸術、文学、公共図書館、成人教育とならんで博物館や展示を担当する関係当局となる（図1：1988年におけるスウェーデンの文化行政機構を参照）。文化事業委員会の任務は、文化

図1 : 1988年におけるスウェーデンの文化行政機構



※ National Cultural Policy in Sweden. (参考文献10) p. 20より転載。

政策を企画担当し政府の文化事業を調整すること、文化活動やその目的の重要性を広く伝え、市民の意見を取り入れたり情報を広めること、各種文化団体の指導的役割を果たすこと、文化政策自体に関する考察を深め、それを発展させる研究を主導するなどである。

この文化政策により、図書館などの文化機関や、劇場や音楽会などの芸術活動が、個々に規定されていくことになる。博物館もまた同様であった。しかしむしろ博物館活動こそが、政策の一翼を担い、地方にいたるまで広く文化政策の概要を浸透させるものであったといえるのではなからうか。現在の文化行政の道筋を決定した1960～70年代の社会的背景と、74年の「国家文化政策」の採択は、文化機関が確固たる政治的支持を得たことを意味する。そしてこの文化政策を受けて、各博物館はここ15年間にさらなる発展を遂げてきた。

(3) 1980年代の動き

博物館活動が活発になればなるほど、博物館と社会の相互作用もより大きくなっていく。これは最終的には、将来における博物館の役割と可能性の問題となるであろう。限られた財源のなかで、博物館は社会の問題や挑戦に立ち向かわなければならない。また同時に、自らの展示方法の革新や新しい情報技術の修得に努め、いかに来館者にとって魅力的な博物館であるかを模索していかなければならない。

1984年12月、スウェーデン政府は文化事業委員会に国立博物館の義務と機能についての調査を命じた。それを受けて、博物館関係部門で活動している人々の間で綿密な協議がなされ、その統計的報告とアンケートの結果として、1986年に文化事業委員会は政府に対して次の3つのレポートを提出した。

- ①「スウェーデンの博物館 Museisverige ; Museums in Sweden」(Rapport ; Report 1986:1)
- ②「博物館の前途 Museiperspektiv ; Museum Perspectives」(Rapport ; Report 1986:2)
- ③「博物館への提案 Museiförslag ; Proposals for Museums」(Rapport ; Report 1986:3)

①は国内150博物館に関する統計データとそのコメントであり、②では今後の博物館や社会の発展についての25本の論文が載り、博物館学的テーマとそのアプローチ方法が論じられている。③は、国内の他の博物館との連携における、国立（もしくは中央）博物館の義務と責任について、文化事共委員会の審議を経て提案されたものである。

③では、18の国立博物館を2つのカテゴリーに分類す

ることが提示された。すなわち「総合博物館 National General Museums」と「専門博物館 National Specialized Museums」である。

「総合博物館」のカテゴリーには、広範囲にわたるコレクションと豊富な博物館学的経験を持つ博物館が該当する。その使命は、様々な分野で全国の博物館間の相互協力と博物館活動の発展を推進していくことである。ここには、国立歴史博物館（前掲）、北欧博物館 Nordiska Museet ; the Nordic museum、民族学博物館 Folkens Museum - Etnografiska ; the Ethnographical Museum、「国立美術館群 Statens Konstmuseer ; the National Swedish Art Museums」³⁾のうち国立美術館 Nationalmuseum ; the National Museum of Artと近代美術館 Moderna Museet ; the Museum of Modern Art、自然史博物館 Naturhistoriska Riksmuseet ; the Swedish Museum of Natural History の計6館が属する。さらにレポート③を受けた政府の法令によって、この6館は、各分野における中枢機関としての機能を果たすべき「法定博物館 Statutory Museums」として認定され、文化事業委員会の下部組織として行政機構のなかに位置付けられた（図1参照）。

「専門博物館」のカテゴリーには、その特殊なコレクションと専門的な知識や技術により、他の一般的博物館を補足することができる博物館が該当する。このなかでは、現在のところ音楽、城館、海事、建築、科学の5館が「法定博物館」の指定を受けている。

委員会はこれ以外にもさらに、博物館同志の連携や他の団体との相互協力を奨励している。今後の博物館の発達を推進する合同企画として、「スウェーデン史の新局面 New Aspects of Swedish History」、「生態学的展望 Ecological Outlook」、「スウェーデンと第3世界 Sweden and the Third World」、「スウェーデンにおける移民文化 Immigrant Cultures in Sweden」といったテーマを紹介し、レポート③を結んでいる。

1974年以来ほぼ15年、文化政策は確実に引き継がれてきた。しかしより正確に言えば、社会発展にともない文化政策もまた補足改訂が行われてきたのである。現代社会の実状と問題に即して、常に新しい指針が打ち出され、新しい目的が付け加えられている。

以上に述べてきたとおり、1970年代の「国家文化政策」の決定と行政組織の改革は、スウェーデンにおける博物館活動にとって非常に大きな意味を持ち、今日の各博物館を規定するものといえる。現在スウェーデン国内には、約300館の博物館とそれに相当する施設がある。文化政策

を推進する役割を担い、政策の目的の1つである「人々への文化的平等を目指した、文化の地方分散」に貢献することにより、その存在意義は社会にとってますます重要なものとして認識されているのである。

III 巡回展示会

(1) 概要

スウェーデンには、国内を巡回し全国的に文化、芸術を広めるための3つの文化機関がある。①巡回劇場公演 Riksteatern ; the National Theatre Centre, ②巡回コンサート Rjkskonserter ; the Institute for National Concerts, ③巡回展示会 Riksutställningar ; the Swedish Travelling Exhibitions である。これらの3機関は「3つのR (the Three R)」と呼称され、政府の援助を受けて、それぞれ1960年代に発足した。巡回展示会は1965年に実験的にその活動が始まっている。

さらに1974年の文化政策の決定にともない、3機関の活動が定義付けられ、国家によって直接運営されるものとなる。また行政機構上では、1976年に文部省のもとで文化事業委員会に統括される(図1参照)。文化政策の指導方針は、これらを通じて全国に文化活動を広めることにある。その目的は、首都圏のみならず全国中に文化生活情報を送り、文化活動に参じる新たなグループを開拓し、個々の創造力を刺激し、かつそれらにおける商業主義的側面を排除することにある。すなわちこの「3つのR」は、文化政策の鍵となる役割を担っている。

巡回展示会機関には、展示についての各領域をそれぞれ担当する、約60人の専任スタッフがいる。そしてその他に、美術関係など展示内容に関する多くの専門家たちと自由契約を結んでいる。その芸術家の作品展示会や、他から借用したり委託された資料による展示会をアレンジし、国内を巡回しつつ各地で開催する。また様々なグループが展示を媒体として自己表現することを奨励し、その展示事業に助言や経済的援助を与える。これらがこの巡回展示会機関の仕事である。

展示会のテーマには様々なものを取り上げられる。例えば美術、手工芸、文化、歴史、自然科学、技術、環境問題、社会的議論に関する話題などである⁴⁾。展示の構成規模は、1 m²から200 m²まで。簡単なパネル状のものから、大がかりな展示場を設営するものまで、展示のための資材や機器が各種用意されており、各展示会や受け入れ側の都合に合わせた柔軟な対応がなされる。映像や視聴覚機器の利用も盛んである。そして常に新しい展示の素材や形態が模索され、試みられている。ショーケース

はほとんど使われず、パネル、スクリーン、木材の枠組といった簡単に組み立て、解体、運搬ができるものを工夫して、自由な陳列空間を創り出す。

この巡回展示会に特徴的かつ代表的な展示形態の一つとして、前面が観音開きになる大型の箱がある。その箱のなかにあらかじめ資料を陳列しておき、そのまま運搬、移動し、それをいくつか組み合わせて展示を構成するのである。これは特に学校や学習サークルにおける展示会に有効であり、また人気も高い。この「展示箱 Exhibition Kits」には、工芸品、模型、絵、写真が設置され、録音や録画された資料、作業の指図、ガイドブックなどが添付されている。

展示品は巡回展示会機関の所有する専用のトラックやワゴン車で移動する。そのトラックはしばしば展示室に早がわりし、これにより、鉄道の通っていないところや人口が少なく博物館その他の施設がない地域など、どこでも展示会を開くことができる。また鉄道専用の大規模なコンテナ車も用意されている。1988年には国有鉄道と提携して、運搬用の貨車をそのまま展示室にする「レールの上の展示会 Exhibitions on Rails」に乗り出した。斬新で大がかりな企画である。

毎年およそ50の巡回展示会が新たに企画される。そのうちの10展示ほどが、同機関以外の手によるものである。各展示は1～2年間かけて国内を巡回し、時には隣国のデンマークやノルウェーに出張することもある。従って1年間に、以前からの企画と合計して約200の各種巡回展示会が行われている。一つの展示会の期間はたいてい2～3週間であるが、テーマや開催場所によってはさらに長期にわたることもある。受け入れ側は各展示規模に応じて補助金を払う。この巡回展示会システムは現在のところ予約でいっぱいであり、充実した活動が行われているといえよう。

巡回展示会機関によるその他のサービスとしては、まず毎年7～8回ほど定期的に開催されるセミナーがあげられる。テーマは展示に関する技術的・教育学的方法論についてであり、希望すれば誰もば参加できる。従って展示業務に関心を持つ人々が、広い範囲から集まってくる。例えば学校教育・社会教育・成人教育関係者、各種団体の代表者、文化事業担当者、博物館員、図書館員などである。

また同機関から、各年度ごとに巡回展示会のツアーをすべてリストアップしたカタログ『Riksutställningar Katalog』が発行され、さらに展示関係の雑誌『Pa Gång i utställningsverige』が年に4回出版されている。加え

て、巡回展示会機関の編集による様々な小冊子も継続的に出ている。『Kit - What is that?』(英・仏・独・西・露語並行記載、1973年)、『Going to Exhibitions』(英語版、1976年、第2版1980年)、『How to Make a Rotten Exhibition』(英語版、1977年、第4版1984年)などは、無料で入手でき、非常に有用なものである。その他、パンフレットや宣伝用の印刷物も多い。

(2) 意義

巡回展示会は、市町村、博物館、図書館、学校、式人教育団体、芸術団体などの協力のもとに各地で展示会を組織するが、さらに小規模の学習サークルや職場の同好会、病院や老人ホームの1室などでも開かれている⁵⁾。展示を受け入れる側の要望に応え、いつでもどこでも誰でも鑑賞することができるのが、この巡回展示会の特色である。

さらに、他者から展示そのものを預かり全国を巡回させるシステムもある。これには、ある博物館や地方の活動グループが、その資料や主張を全国的に展示、公開し、広く知らしめることができるという効果がある。またある博物館に保管されている美術品を含む展示会では、その1つしかないオリジナルの資料を鑑賞する機会を、巡回展示することによって、より多くの人々に提供できるという利点がある。その際、美術品などの資料を美術館や博物館から賃借する費用は、すべて国家によって負担される。その一方で、時には資料の複製を多数作成し、多くの地域で同時に展示会を行う場合もみられる。企画の目的に合わせ利用者の必要に即した対応が可能よう、配慮されているのである。

あるサークルや同好会の学習成果発表の場、労働問題や環境問題などに関する各種団体の主義主張の場として、独自に展示会を組織する希望があった場合には、巡回展示会機構が全面的にバックアップし、助言や経済的援助を行う。多くの活動グループが、その意見を発表し、また一般大衆の注意を社会問題に引き付けるために、自分たちの地域で、そして全国に向けて、展示会を企画する。展示とは安上がりで済むマスメディアであり、財源に限りのあるグループも、この方法によって広く大衆に訴えかけることが可能となる。

次に一例として、巡回展示会機関が取り組んできた、障害者についての、また障害者のための各種展示会を紹介しよう。1965年の発足以来、同機関は常に障害者に視点を向けてきた。1974年の文化政策において、ハンディキャップを持つ人々に対する配慮が明確に打ち出されたこととも呼応して、1970～80年代には同機構による非常

に多くの障害者に関する展示会が開催されている。

まず1971～73年に、スウェーデン国内23カ所において、大規模な展示会が行われる。それは日常生活のなかに、障害を持つ人々にとっていかに不利不便なことが多いかを、具体的に知らしめるものであった。展示はストックホルム美術工芸デザイン学校の学生たちの協力を得て制作され、入場者は車イスで展示場内を移動できるようになっている。そこで彼らは、車イスの身体障害者がいたるところ一台所、居間、騒々しい通り、店、仕事場、避難場などで遭遇している障害物(すなわち邪魔物)を体験するのである。この展示は身体障害者が社会的、経済的に否定されている事実を描き出すと同時に、障害のあるなしにかかわらず全ての人々にとって、不適当にデザインされた物理的環境がいかに制限的で無用なものであるかをも提示している。展示会はさらに各開催地において、その地域ごとに企画された関係展示や講演会、討論会によって補完された。解説資料も豊富に用意され、入場者に配布されている。

「絹、ベルベット、ぼろきれ… Silk, Velvet, Rags…」と題された展示は、13世紀から現代にいたる様々な西洋ファッションを、人形を使って陳列したものであり、特に視力障害者を対象として作られた。視力が減退しつつある息子を持つ女性が人形を作成し、スウェーデン視力障害者協会とトムテボダ盲学校の協力で展示を設定し、それを各地に巡回させたのである。同様に視力障害者のために、1978年には「陶器の感触 the Feel of Pottery」が開催されている。展示は石器時代から現代にいたる土器、陶器の発達を追うもので、点字や拡大印刷された見出し、浮き彫りになったスクリーンのディスプレイからなっている。その鮮やかな色彩と高く浮き上がらせた絵は、もちろん健常者をも十分楽しませるものであった。加えて3つのオープンケースで、鉄器時代の陶器窯の模型と古代土器の複製品をみせた。土器類は当時の素材と技法にならって製作されている。展示品の全てに手を触れることができ、実際の感触を確かめられる。資料の解説はカセットテープに録音されて貸し出される。この種の展示会は「触れ、そして感じる Touch and Feel」というテーマでシリーズ化され、他にも様々な企画が実行に移されてきた。彫刻や工芸品、絵画、民族学的資料などを、視力障害を持つ人々にも触れて理解してもらうよう、努力が払われているのである。

聴力障害者に対しては、1976年に巡回展示会機関が「身振り・手振り Body Language - Sign Language」と題する、視覚によるコミュニケーションについての写真展

示を主催した。そこでは展示関係者も入場者も全ての人が、身振り、手まね（ジェスチャー）、ものまね（マイム）で会話を進める。スウェーデンでは、聴力言語障害者は2つのタイプの手話法を用いる。1つは万国共通の広く使われているもの、もう1つは「スウェーデン手話」と呼ばれるものである。手話言語には精巧な表現と複雑な解釈があり、上記の展示会ではこの言語を説明する見出しや絵が設けられて、障害者との手話によるコミュニケーションの理解を深め広げるよう配慮されている。1978年には、聴力障害を持つ児童とそのための試験的な特別学校の教師のグループによる展示「センターにおける聴力障害児童 the Deaf Child in the Centre」に対し、アイディアと実際の助言を提供した。展示内容は、聴力障害を持つ人々に接する態度、コミュニケーションの手段、有効な学習方法、学校環境や教師の役割などが大きく説明され、種々の提言がなされている。そしてこの展示が各地を巡回することにより、他の聴力障害者のための学校のよい参考となり、また各地で関連する特別セミナーが開かれるにいたったのである。

ある精神病院の患者たちによる作品展や、自閉症に陥ってしまったある人物をテーマにした展示もしばしば企画され、各地を巡回する。1978年には、ストックホルムにある精神障害者のためのデイケアセンターの教育方法を紹介した展示会もあった。これはスウェーデン工業デザイン協会と協同でなされたものである。同センターは、機織り、染色、人形作りなどができるワークショップを持ち、また買物や地下鉄の乗り方、映画に行くといった日常的な行動の訓練も行っている。展示には、センターの活動やそこで製作された工芸品の写真および解説と、様々な情報書類が添付された。そして展示資料に基づき、各地で作品の複製が作られた。また同センターに関する書物も刊行された。そこでは、精神に障害を持つ人々も、自分たちのレベルで常に進歩していく全く普通の人々であるということが強く主張されており、彼らの努力のあとが言葉で、そして絵で表現されている。

これらは巡回展示会機関の活動例の一部でしかない。しかし障害者に対する理解を深める上で大変有意義であり、福祉社会の発展に大きく貢献する活動といえる。その視点と実績は高く評価されるべきものであろう。

以上で巡回展示会の実情が明らかになったところで、ここにもう一度その意義を簡条書きにして、第III章のまとめとしよう。

- 1 展示会が全国各地を巡回することにより、文化的な平等を是正し、地方であっても各種の資料に触れる機

会が得られる。

- 2 各地の博物館との提携により、その博物館の資料を補強し、より充実した博物館活動の展開に寄与する。
- 3 各地の美術展示および美術教育に対し、指導的な役割を果たす。
- 4 展示の専門機関として、各方面からの質問に答え、展示についての助言を行う。
- 5 あらゆる人々および団体に、展示会を主催する機会を与える。
- 6 展示に現代の社会問題を取り上げることにより、問題提起や大衆の議論を奨励する。

巡回展示会が発足して20年あまり、同機関は展示を媒介とした文化普及のあり方を試行錯誤により探ってきた。そして巡回展示会のシステムは、文化政策を基調にしてスウェーデンの博物館活動のなかにしっかりと根付いている。多くの人々に親しまれ、人気を博していることから、その意義は実に大きいものであるといえよう。

IV スウェーデンとアフリカの博物館交換プログラム

(1) プログラムの発足

文化政策でも主張された国際化の実現に向けて、スウェーデンはアフリカ諸国との提携を進めている。1984年にICOM スウェーデン委員会は、スウェーデンとアフリカの博物館との間で交流を行う「友好博物館 Friendship Museum」の構想を立案した。その目的は両者の知識の交換に新たな道を見出すことにある。また両国の博物館や博物館研究団体を援助し、博物館業務を確立し、人々により多くの知識と理解を与えるという博物館の果たす役割を強調することも重視している。基本的な考え方は、ICOMの目的（ICOM規約第7条にいう「各博物館間、各国の博物館に携わる職員間で相互に協力と援助を行う」）に沿うものである。計画は徐々に整理され、次第に内容が明確になりつつある。

スウェーデンには、すでにスウェーデン国際開発協会 the International Development Authority (SIDA) という機関があり、そのなかにアフリカの国々と幅広く交流するための数々のプログラムが用意されている。最近の方針は、文化的側面に重点を置くようになってきた。その文化活動の一環として、博物館の重要性が注目され始める。博物館交換プログラムが提案される背景には、そういった流れがあった。

このプログラムの発端は、1984年初めにストックホルムの文化センター Kulturhuset ; the Cultural Centre of the City of Stockholm で開催された、「出会いの場 ア

フリカ Meeting - Place Africa」と題する大規模な展示会である。これは同年スウェーデンで行われた ICOM 総会におけるアフリカ側の積極的な提唱がきっかけとなっており、会場ではアフリカに関する様々なテーマの小展示を組み合わせ、アフリカの文化と生活について来館者に深い印象を与えることを目的としている。それまでスウェーデンは、アフリカ大陸に対して非常に表面的かつ一面的な見解しか持っていなかった。この展示会では、展示のみならず映像資料の活用や講演会、討論会を設けて、来訪者がアフリカを多角的に理解できるよう工夫している。そのなかで ICOM スウェーデン委員会は、「アフリカの博物館 Museums in Africa」というテーマを設定し、交換プログラムの端緒を開いたのである。この企画をきっかけに、スウェーデン国内の博物館がアフリカに対する大きな関心を持ち始め、多くの博物館において、何らかのかたちでアフリカをテーマに特集を組んだ展示が行われていった。巡回展示会機関も多数の展示会を組織している。テーマも文化、工芸、美術、自然、水害、旱魃、土地浸食、女性、社会問題、開放運動と実に様々であった。

交換プログラムを主導し具体的に運営していくのは、ICOM スウェーデン委員会である。同委員会はまず初めにこの企画をアフリカ側の協力団体であるアフリカ博物館・記念物・遺跡機関 the Organization for Museums, Monuments and Sites of Africa (OMMSA) とアフリカ諸国の ICOM 委員会に申し込んだ。そしてさらに機会を見つけては、アフリカの博物館関係者にこの計画について説明してきた。その結果、次第にアフリカ側の反応も大きくなっていった。アフリカ側の問い合わせ、要望には様々なものがある。スウェーデン委員会は、それらに対応して情報の整理を行い、その内容と範囲によっては SIDA のプロジェクトに幹施している。

「友好博物館」に関するアフリカの博物館からの申し込みは同委員会で受け付け、年に6～8回開かれる定例会議において審議する。それぞれに調査がなされ、スウェーデン国内の相応の博物館と連絡をとって、交換プログラムに関心があるかどうかを確認する。博物館から積極的な反応があれば、改めて関連する全情報をその博物館に渡す。そこから先の細かい折衝は、当事者である「友好博物館」同志で進められる。同委員会は両者の仲介役として、その後も調整や助言を行う。

またスウェーデン側の「友好博物館」候補には、地方博物館が望ましいとされた。地方博物館の立地の多様性、多面的な活動範囲、館活動発展への前向きな姿勢が重視

されたからである。またこのプログラムが、どちらか一方の利益に供するのではなく、「友好博物館」同志が対等かつ相互に発展することを求めていることもその大きな理由である。あわせて地域社会の紹介と交流が進められる可能性もあろう。現段階では、アフリカ14カ国と接触があり、そのうち8カ国14館がスウェーデン国内の博物館と「友好博物館」の関係を結び、このプログラムによって交換を進行させている。

国際連合は、1988～97年の10年間を世界文化発展年 the World Decade for Cultural Development とすることを宣言した。そこでこの交換プログラムは、この文化年間におけるスウェーデンの国家的なプロジェクトの一つとして、「スウェーデン・アフリカ博物館プログラム Swedish-African Museum Programme (SAMP)」という正式名称で、ICOM スウェーデン委員会により本格的に展開されることになった。この時に明らかにされた SAMP の目標は、以下の4点である。

- 1 「友好博物館」の理念を基礎付け、さらに発展、確立させる。
- 2 両国の博物館間における技術、情報、経験の交換を通して、「友好博物館」の関係を創り出す。
- 3 国境を越えた連帯を深める。
- 4 この10年間に、世界中の様々な地域の博物館間で行われる国際交流や協力に関する、一つの理想的モデルを形成する。

1989年5月、スウェーデンで SAMP の第1回会議が開かれた。当時「友好博物館」に登録していたアフリカ8カ国13館とスウェーデン国内13館の計26館、関係者を含めた150人が集い、さらなる交換推進を話し合う好機となる。この会議は三つの部門に分かれていた。①ワークショップはストックホルム郊外の高校で開かれ、あるテーマを設定し、それを博物館の展示でいかに表現していくか、その技術を具体的に探求した。②ストックホルムの国立民族学博物館で行われたセミナーでは、博物館の立場からみた文化の概念について、5人の報告をもとに活発な討論がなされた。ここではアフリカの博物館の問題点や、文化の果たすべき役割、両国相互の希望といった議題がとりあげられている。そして③実際に、パートナーであるスウェーデン国内の「友好博物館」を訪れ、その地域の背景を踏まえて、今後の協力関係を検討したここには博物館のスタッフのみならず、その地域の政治家や一般市民も参加している。

さらに1991年夏には、ジンバブエで4週間にわたり、展示に関するワークショップとセミナーが開催される。

ここには各「友好博物館」から2名ずつの参加が予定されている。このように、将来的にはスウェーデンとアフリカ諸国で交互に、定期的な合同会議がもたれることが望まれている。

なお SAMP の活動報告として、毎年 ICOM スウェーデン委員会から情報パンフレット (Newsletter) が発行されている。

ところで、このプログラムが対象とするのは1つの地域一すなわち、あくまでアフリカ大陸に限るという理念がある。集中的な成果を達成するためには、こうした制限が必要不可欠だからである。それでは一体なぜアフリカがその対象となったのであろうか。まず第一に、アフリカ大陸の広大さと、文化の多様性に着目したことがあげられよう。そしてさらに、このプログラムに先行する「交換」事例の存在が大きかった。

スウェーデンには、ストックホルムとヨーテボリの2つの国立民族学博物館がある。もともと民族学博物館は、資料の性格上、アフリカと深いかわりを持っている。前述した SIDA のプロジェクトにより、既にストックホルムの国立民族学博物館が、資料収集や現地調査、研究の過程においてアフリカ諸国と交流し、大きな成果をあげていた。それがアフリカの博物館に注目するきっかけとなったのである。民族学博物館はボツワナで資料収集と現地調査を行った。首都ハボローネの国立博物館員が同行し、資料収集、整理作業は彼らの専門的知識によって補われ、得るところ大であった。同時に2名のスウェーデン人博物館員が2年間同国立博物館に勤務し、展示活動と技術的側面を担当して様々な助言を行い、博物館の建物の拡張にも貢献している。

ICOM スウェーデン委員会は、このような SIDA の複合的なプロジェクトとも連携をとり、すでに独自に「交換」を行ってきた国立民族学博物館を重要なパートナーとみなして、その豊富な知識と経験によりプログラムを充実させ発展させるべく、協力を仰ぐものである。

(2) 意 義

この交換プログラムによるアフリカとの協力関係は、スウェーデンの博物館の間に新たな国際的視野をもたらした。他者の目を通して自国の文化をみるとき、それはさらに明確に客観的にみえてくるものである。外からみつめることにより、意外な眼識や意見が出てくる場合がある。プログラムを長期に継続して行うことにより、その効果はより一層確実なものになるに違いない。

また博物館活動を発展させるのみならず、博物館関係者の個々に対して、様々な可能性とチャンスを提供した

ことにもなる。彼らにとって、この交換プログラムは新鮮かつ予測もしなかった体験となった。彼らはスウェーデンとアフリカの両方で勤務することにより、その規模、視野、時間、経費の違い、自国とは異なるレベルや種類の問題に直面しつつ、なお博物館活動の理想は普遍的なものであることを理解するにいたった。しかし博物館の業務には常に理論的側面と実践的側面が存在し、それらはしばしば食い違う。他国でのそういった経験は、自分が所属する博物館の現在の形式や方向性についても反省を促すであろうし、自分の考え方の不備に気付かせ、変化のきっかけを与えてくれるものである。博物館に従事する者にとって、それは大きな収穫であるといえよう。

そして広い視野と国際性を身につけた上で、自国の博物館活動に改めて目を向けることができるようになる。それは博物館の全ての機能一すなわち収集、記録、整理、保存、補修、教育、展示、研究、訓練、そして博物館の概念そのものに反映されるであろう。これらの機能は、知識と理想に基づくものである。それをスウェーデンとアフリカの博物館で分けあうところから、相互の発展が生まれる。「To share is to expand」とうたわれた由縁である。

歴史的環境や文化の異なるアフリカ諸国との交換プログラムは、相互に新たな資料、知識、方法の導入に役立つ。またその一方で、「文化の持つ機能とはなにか」、「大都市のよりどころのなさや地方で進行する過疎化といった社会の危機的状態において、文化はいかなる役割を果たせるか」といった両者共通の普遍的テーマを、ともに模索していこうとしているのである。交流は、スタッフ、展示、資料、技術、知識、経験、情報など、博物館活動の全ての領域にわたる。「交換」は型にはまった新鮮味のない形式にこだわってはならない。多様な形態による「交換」こそ、相互に学ぶところ大なのであり、異国間の接触と理解を深めるものとなる。しかし最も重要なのは、「何かを一緒に行う」ということである。

スウェーデンとアフリカの交換プログラムは、現在においてはまだ新しい計画で、試行錯誤の段階であるが、博物館活動をさらに前進させるものであるといえる。それは文化的にも社会的にも有益であろう。長期的な視野に立てば非常に多くの可能性を含んでおり、大きな成果が期待されている。

博物館活動においてアフリカが後進地域であったことは、まぎれもない事実である。それは、1977年5月にレニングラードおよびモスクワの両都市で開催された第11回 ICOM 総会における、ガーナのバンズィー N. K.

Bondzieの講演によく表れている。同大会のテーマは「博物館と文化交流Museums and Cultural Exchange」であり、モスクワでの全体会議の初日には、ICOMの活動と博物館相互の国際交流に関する5つの講演がなされた。そのなかでバンズイーは「ICOMと地域活動」と題して、アフリカの博物館活動の歴史と現状、将来の課題と抱負を述べている。彼はガーナ博物館・記念物協会の会長であり、また1977年に発足したばかりのOMMSAの事務局長も務めていた。

彼によれば、アフリカ諸国の独立当初は、食料、水、住居、教育、保健施設など基本的生活条件の確立がまず優先され、博物館活動を含めた文化的側面は、経済や農業政策の緊急性に劣るとみなされた。独立運動自体はナショナリズムと固有の文化や伝統の重視に基づいていた。にもかかわらず、いったん独立が達成されると、それらを保護すべき博物館の整備は後回しとなる矛盾に直面したのである。それでも遅々たる歩みながら、博物館活動発展に対するアフリカ諸国の努力は続けられてきた。ICOMやUNESCOの援助も確かに得ている。しかしICOMの掲げる理想に程遠いのが、アフリカ諸国の現状である。彼はアフリカにおける博物館の意義と重要性を述べ、OMMSAの成功を期待し、将来の展望を打ち出した。そしてICOM事務局の職員に未開発国からの人物を任用するよう配慮を求め、また1975～77年度ICOM事業計画にある、アフリカにおける博物館学の定義付けと職員の訓練についての国際的協力を改めて喚起している。彼の講演には多くの問題提起がなされていると同時に、当時のアフリカの博物館活動の憂うべき現状、その後進性が語られていたのである⁶⁾。

スウェーデンという国家が、高度の福祉社会を実現し、デモクラシーを実践し、環境保護の徹底、平和維持に多大な努力を払っていることは、よく知られている。そして同国の国際化政策は、難民を含め多数の外国人を受け入れてきた。現在では世界約150カ国からの外国人が国内で生活しており、さながら小さな国際国家である。スウェーデンの人口約850万人のうち、外国人は8～9%を占める。外国人政策の3原則は、平等の原理、選択の自由、協同の原理であり、外国人にスウェーデン人と同レベルの生活を保障するものである。

さらにスウェーデンは常に小国や民族解放運動を支持する態度をとっている。国民1人当りのODAは日本の2.5倍である。その常に弱者の立場を保護する姿勢により、逆に発展途上国からスウェーデンは非常に支持されており、「第3世界の期待の星」ともいわれている⁷⁾。こ

うした社会的背景が同国の文化政策と博物館活動にも反映され、アフリカとの博物館交換プログラムの誕生を容易にし、スムーズに発展させる遠因となっているのではないだろうか。

おわりに

以上、スウェーデンの博物館活動において注目すべき3点—文化政策、巡回展示会、博物館交換プログラム—を、その社会的背景とともにみてきた。いずれも福祉や社会教育と密接に結び付いており、スウェーデンの国家体制をよく物語っている。

もちろん文化政策の実現は、博物館活動だけで成り立つものではない。ナポレオン戦争以来決して参戦せず180年間平和を維持してきた同国には、多くの資料が残っている。文書群の蓄積により早くからその保存に意が払われ、19世紀当初から図書館の整備が進んだ。図書館・文書館活動は非常に盛んである。文化政策の進展も、福祉や成人教育など様々な側面を包括した1960年代の社会自体の進歩や改変の動きと、軌を一にするものである。博物館は社会の諸機関と連携して、文化政策推進の一翼を担う。してみれば、博物館がいかに社会的存在であるかが、改めて痛感されよう。スウェーデンは、博物館の存在意義とその価値を十分に認識し、活用している。そして人々が博物館に親しみ、よく足を運ぶことを、その帰結とみなしたい。文化を重視し、常に新しい課題に積極的に取り組む国家の姿勢を、高く評価できよう。

目下スウェーデンでは、博物館の新たな役割としてエコロジーに取り組んでいる。国家のエコロジー政策推進文化事業委員会的主導する博物館のためのプロジェクトを受けて、「エコロジー知識の普及 the Spread of Ecological Knowledge」といったテーマが多数企画された。エコミュージアムの展開も非常に興味深く、今後さらに注目したいものである。

そしてもう1つの課題として、本稿で述べてきた同国の文化的特徴が、実際に個々の博物館においていかなる活動となって現れているかを考察することがあげられよう。この点に関しては、交換プログラムの項で言及したストックホルムの国立民族学博物館を例として論じてみたいと考えている。同館の目的や業務をまとめた小冊子では、文化政策やアフリカ諸国との「交換」に触れ、館の見解と展望、具体的業務内容が記されている。それをもとに、次稿では同館の活動を主体とした検討を進めていきたい。

(1991.2.10)

注

- 1) スウェーデン語のインテンデントintendent は、英訳では“curator”であり、博物館専門職員を指すが、ここでは敢えて「学芸員」とは邦訳せずに、スウェーデン語の発音のまま表記している。詳しくは、次注2) 拙稿を参照されたい。
- 2) 『博物館学雑誌』第15巻第1・2号合併号、全日本博物館学会、東京、1990年3月。
- 3) 「国立美術館群」は、国立美術館、近代美術館、東方博物館の3館からなる。詳しくは、前注2) 拙稿参照。
- 4) 1970年代後半の5年間におけるテーマ別分類は、美術・工芸33%、児童・青年・学校27%、社会問題・情報18%、文化史15%、自然科学・技術・環境7%であった。
- 5) 例えば1981年度のうちわけは、学校42%、文化施設・図書館28%、博物館・アートギャラリー8%、成人教育団体5%、その他(職場・病院・遊園地など)17%である。
- 6) 『博物館と文化交流ー第11回 ICOM 総会講演集ー』国際博物館会議日本委員会、東京、1978年3月。
- 7) 以上は、1990年9月22・29日(22:15~23:00)NHK教育テレビ放映のウィークエンドセミナー「福祉国家への選択・スウェーデンを検証する ④国際化への挑戦」,「同⑤平和とエコロジー」(岡沢恵美氏出演)より学び、引用した。

参考文献

- 1 Gunnar Svensson, “State Organizations and the Promotion of Cultural Activities in Sweden.” the Swedish Institute, Stockholm, 1982.
- 2 “Fact Sheets on Sweden : Swedish Cultural Policy.” the Swedish Institute, Stockholm, Feb. 1986.
- 3 “Fact Sheets on Sweden : General Facts on Sweden.” the Swedish Institute, Stockholm, Mar. 1988.
- 4 “Fact Sheets on Sweden : Cultural life and Cultural Policy in Sweden.” the Swedish Institute, Stockholm, Jun. 1990.
- 5 “Swedish - African Museum Programme, Information from the meeting and conference in Sweden, May 1989.” ICOM Swedish National Committee, Stockholm, Dec. 1989.
- 6 “Swedish - African Museum Programme, Newsletter 1990.” ICOM Swedish National Committee, Stockholm, Dec. 1990.
- 7 *Riksställningar - The Swedish Travelling Exhibitions.* Riksställningar, Stockholm.
- 8 *The Ethnographical Museum - Aims, Tasks and Programme.* Etnografiska Museet, Stockholm, Jun. 1979.
- 9 *Swedish State Cultural Policy - A National Report : Objectives, Measures and Results.* the Swedish Ministry of Education and Cultural Affairs, the Swedish National Council for Cultural Affairs, Stockholm, 1990.
- 10 John Myerscough, *National Cultural Policy in Sweden - Report of a European group of experts.* the Swedish Ministry of Education and Cultural Affairs, the Swedish National Council for Cultural Affairs, Stockholm, 1990.
- 11 Ulla Keding Olofsson, “Beautiful Moments : an art exhibition with a shock effect - Swedish National Scheme for Travelling Exhibitions,” *Museum*, Vol. XX III No.1, UNESCO, 1970/71.
- 12 Ulla Keding Olofsson, “The role of the museum in a decentralized cultural policy. Meeting of the International Committee of ICOM for Education and Cultural Action, Umeå, 1976.” *Museum*, Vol. XXIX No.1, UNESCO, 1977.
- 13 Stella Westerlund and Thomas Knuthammar, “Handicaps prohibited - travelling exhibitions in Sweden.” *Museum*, Vol. XXX III No.3, UNESCO, 1981.
- 14 Astrid Wexell, “Tactile pictures in Sweden.” *Museum*, Vol. XXX III No.3, UNESCO, 1981.
- 15 Kjell Engström, “The ecomuseum concept is taking root in Sweden.” *Museum*, Vol. XXXV II No.4, UNESCO, 1985.
- 16 Ulla Keding Olofsson, “Riksställningar : from travelling exhibitions to an information centre.” *Museum*, Vol. XXX VIII No.4, UNESCO, 1986.
- 17 Stella Westerlund, “Twenty years of travelling exhibitions.” *Museum*, Vol. XXX VIII No.4, UNESCO, 1986.
- 18 Gudrun Vahlquist, “Developing museums - part of Sweden's cultural policy.” *Museum*, Vol. XL No. 4, UNESCO, 1988.
- 19 Margareta Björnstad, “Swedish museums ; a

-
- brief history. " *Museum*, Vol. XL No.4, UNESCO, 1988.
- 20 Hans Johansson and Bo Nilsson, "Museum information and communication technologies : the Swedish approach. " *Museum*, Vol. XL No.4, UNESCO, 1988.
- 21 Elisabet Olofsson, "A Professional exchange programme : Sweden - Africa. " *Museum*, Vol. XL No. 4, UNESCO, 1988.
- 22 Bo Nilsson and Bengt Rosén, "Cultural history museums and human ecology - a challenge to integration." *Museum*, Vol. XL No.4, UNESCO, 1988.
- 23 新井重三「野外博物館総論」(『博物館学雑誌』第14巻第1・2号合併号, 全日本博物館学会, 東京, 1989年3月)。